

甲状腺穿刺吸引細胞診で硝子化索状腫瘍を疑った1例

◎浦 雅彦¹⁾、森 真俊¹⁾、河合 邦恵¹⁾、宇都宮 孝治¹⁾、福森 恭代¹⁾、小谷 敦志¹⁾、久保 修一¹⁾、若狭 朋子¹⁾
近畿大学医学部奈良病院¹⁾

【はじめに】硝子化索状腫瘍は甲状腺腫瘍の約0.1%と稀な腫瘍であり、その細胞像は、核内細胞質封入体や核溝が認められることから、乳頭癌と誤認されやすいことが報告されている。今回我々は、甲状腺穿刺吸引細胞診により、通常の乳頭癌では半数以下にしか認めない核内細胞質封入体が異常に多数認められ、硝子化索状腫瘍を疑った1例を経験したので報告する。

【症例】60歳代、女性。人間ドックでの超音波検査において、甲状腺左葉に径1.1cmの結節性病変を認め近医を受診、甲状腺穿刺吸引細胞診で乳頭癌または硝子化索状腫瘍の可能性を指摘され、手術目的で当院を受診された。

【細胞像】軽度の核腫大、軽度に核の大小不同、細胞質は顆粒状、細胞境界不明瞭を示す変性した濾胞上皮細胞が、索状から軽度の重積性集塊で見られた。不規則重積性集塊や乳頭状集塊は認められなかった。それらの集塊には、多数の核内細胞質封入体が認められた。硝子化索状腫瘍または乳頭癌の可能性を疑い鑑別困難と判定した。

【組織像】甲状腺炎を背景に、8×6mmの薄い線維性被膜を

持つ結節が認められた。索状増生を示し、多数の核内封入体を含む乳頭癌の核所見を示した。PAS染色陽性の硝子化基底膜様物質を少量認め、被膜浸潤の増生認めないことから、硝子化索状腺腫と確定診断された。リンパ節転移も認められなかった。

【まとめ】穿刺吸引細胞診により疑った硝子化索状腫瘍の1例を経験した。本症例は乳頭癌と誤認されやすく術前に疑われる例は少ないため、細胞の特徴を熟知することで、ある程度の診断が可能であると思われる。

近畿大学医学部奈良病院 臨床検査部
0743-77-0880(内線：3056)